

## 博士論文の和文要旨

論文題目

ブルゴーニュ地方の方言テキスト  
*L'âme du Morvan* の地理的同定  
ー地理言語学的分析と量的分析に基づくアプローチー

氏名

伊藤 玲子

第1章では、本研究の背景と目的・研究設問、分析の構成について述べた。北フランス東部のブルゴーニュ地方の中央に、東西約 60km、南北約 100km の広さを持つ Morvan モルヴァンと呼ばれる地域がある。Taverdet(1973a)によると、1960年代のブルゴーニュ地方でパトワは既に衰退していたが、例外的に Morvan ではまだ話されていたことから、Morvan は言語的に保守的な地域といえる。さらに Régnier(1979a)は Morvan には言語的多様性があると述べる。言語的多様性には、言語内的要因と言語外的要因がある。Morvan は周辺地域より標高が高いという地理的特徴があり、またブルゴーニュ地方は長いあいだ1つの行政に属さず、Morvan も1つのまとまりとして管理されてこなかった。すなわち、Morvan 方言を言語外的要因の地理的境界や歴史的行政区分の変遷を踏まえて分析する必要がある。Taverdet(1973a)が予想したように現在は Morvan でも既にパトワ話者が存在しない可能性が大きく、音声データを入手することは困難なことから、代替として方言テキストに注目した。方言は書くためのものではないが、消滅しつつある方言を記録するために方言テキストが執筆されてきた。Jejcic(2012)は方言テキストの綴りと言語地図を照らし合わせ、綴り字が著者の故郷の発音を表すことを確認したことから、方言テキストの綴り字を地理言語学的に分析できる可能性が十分にあると考えた。

1923年に出版された *L'âme du Morvan* ラーム・デュ・モルバン『モルヴァンの魂』は、著者である Alfred Guillaume アルフレッド・ギョームの故郷である Morvan 北東部の町 Saulieu ソーリュウ付近の方言で書かれたと明記されている。しかし収録される39話のストーリーは、ストーリーによって別の綴り字で記される語があることが

認められた。39 ストーリーは、Guillaume が執筆した作品と、既に刊行されていた年鑑から転載した作品で構成される。年鑑から転載された作品の著者は明らかではなく、Guillaume の可能性もあるが、他の著者の可能性も否めない。以上のことから、39 ストーリーは1つの話し言葉で書かれたのではなく、Morvan の複数の地域の異なる話し言葉で書かれたと仮説をたてた。

本研究は、方言テキスト *L'âme du Morvan* 1923 年初版の話し言葉を地理的に同定することを目的として、以下の研究設問を設定した。

- *L'âme du Morvan* 1923 年初版の 39 ストーリーは Morvan のどの地点の話し言葉か

本研究では音価推定プロセスを構築した。フランス語における書記素と音素の関係と、言語地図 *Atlas linguistique et ethnographique de Bourgogne (ALB)* 『ブルゴーニュ地方言語民族誌地図集』(Taverdet 1975; 1977; 1980) を参照して、綴りから音を推定する。

本研究の分析は、地理言語学的観点による音声分析と綴りの量的分析という、異なる2つの分析で構成され、それぞれの分析において地理的同定を行う。どちらの分析も音価推定プロセスに依拠して進められる。

第2章では、Morvan 方言の言語学的特徴と方言テキストの綴り字分析についての先行研究について整理し、未解決点を提示した。Taverdet (1973a) は Morvan の保守性と音声の特異性について述べ、Régnier (1979a) は言語的多様性について音声・形態・語彙の側面から記述する。しかし、地理的特徴や歴史的行政区分の変遷の観点の分析は行われていない。また、Jejcic (2006a) は方言テキストでは同じ書き手でも綴り字が揺れることを明らかにし、Jejcic (2006b) は読者の理解を助けるために方言形の綴りに標準形の綴りが混ぜられると述べる。さらに、Jejcic (2012) は綴りが著者の故郷付近の発音に一致することを確認した。この結果は方言テキストの綴りから地理的同定する可能性を示唆する。しかしながら、綴りを言語地図と比較する手法についての詳細な記述はない。

第3章では Morvan の地理的構造、行政区分の変遷、フランスの言語境界と Morvan の位置づけを概観し、言語地図資料に基づく音声・形態の分布について検討した。Morvan は、ブルゴーニュ地方を構成する4県(ヨンヌ県、ニエーヴル県、コート＝ドール県、ソーヌ＝エ＝ロワール県)にまたがり、周辺地域より標高が高い。また歴史的行政区分との関係については、コート＝ドール県とソーヌ＝エ＝ロワール県は旧ブルゴーニュ州に属し、ヨンヌ県は旧ブルゴーニュ州・旧オルレアネ州・旧シャンパ

ーニュー州が部分的に集まって構成された。ニエーヴル県は 1986 年までの約 1000 年間、他の 3 県とは別の管轄下にあった。言語的には、Morvan はオイル語圏に属する。さらにパイロット的分析の結果から、Morvan は、西方面から東進して来る標準形とブルゴーニュ方言がぶつかる地域であることが明らかになった。

第 4 章では、方言テキスト *L'âme du Morvan* (以下 Guillaume (1923)) の著者や内容と言語的性質を明らかにし、コーパスや分析対象語を選定する基準などについて述べた。Guillaume (1923) の 39 ストーリーの中で、方言で書かれた部分をコーパスとし、意味と語源が明らかで、かつ ALB の見出し語である 294 語を分析対象語として選定した。

第 5 章では本研究の分析手法について説明した。先ず音価推定方法プロセス、次に第 6 章の音声分析の方法、最後に第 7 章の量的分析の方法について記述した。

第 6 章では、本研究で核となる 2 つの分析のうちの 1 つである地理言語学的観点による音声分析について論じた。分析の結果、母音と子音は、地域フランス語としての方言形、古い音声や語、標準形がみられた。方言形が分布する地域は旧ブルゴーニュ州とほぼ重なるが、行政区分だけで全てを説明することはできない。また、古い音声や語が Morvan に取り残され、言語島を形成していた。標準形は主にヨンヌ県西部やニエーヴル県と連続する。語末子音 *-r* については、17 世紀以前にさかのぼる音声の脱落と、17 世紀以降の再建が確認された。

綴りが標準形でも、ALB 上の Saulieu 付近に標準形が分布していない場合があった。これは Saulieu 付近の話し言葉で書かれたという記述と矛盾するが、この場合は標準語がコーパスに現れたと考える。その理由として以下のことが考えられる。①著者は方言とフランス語のバイリンガルなので、標準形が混じる、②読者の理解を助けるためにフランス語を混ぜた可能性がある、③19 世紀末にフランスで義務教育が始まり、20 世紀前半の Morvan でも標準化が始まっていた。また、綴り字の揺れは音韻対立の有無を示唆する可能性もある。

第 7 章では、もう 1 つの分析である語の量的分析について論じた。分析対象としたのは、[1]294 語、[2]カテゴリー別に分類した語 (宗教に関わる語、農業・酪農・農村生活に関わる語)、[3]主語人称代名詞と動詞の形態である。それぞれについて、39 ストーリーと Morvan の 18 地点との一致比率を算出し、ストーリーをクラスター分析した。そして各クラスターと地点との一致率を可視化した。その結果、[1]において 39 ストーリーは地点 30, 27, 65, 80 と高一致だった。[2]の宗教に関わる語は Morvan

では地域性がみられなかった。一方、農業・酪農・農村生活に関する語は圧倒的に地点 30 と高一致を示し、獣医だった Guillaume の活動範囲を示唆した。[3]は概ね旧ブルゴーニュ州の地域と一致した。

第 8 章では、第 6 章と第 7 章の分析結果を統合し、39 ストーリーがいずれの地点の話し言葉と最も近いかを総合的に検討した。全ての分析結果は、高一致地点として地点 30 : Saint-Martin-de-la-Mer サン＝マルタン＝ドゥ＝ラ＝メールを示した。この結果によって、2つの異なる方法によって得られた分析結果の一貫性が確認された。地点 30 は ALB の調査地点の中で著者の故郷 Saulieu に最も近い地点である。しかし、地点 30 に完全に一致するストーリーは存在しないことから、コーパスの話し言葉は一定の広さを持つ地域の話し言葉とすることが妥当である。

第 9 章では研究設問「*L'âme du Morvan* 1923 年初版の 39 ストーリーは Morvan のどの地点の話し言葉か」に回答した。以上の分析結果に基づき、39 ストーリーは「Saulieu 付近および Morvan 北東部・中央部のバ＝モルヴァンの話し言葉」とであると結論づけた。39 ストーリーが複数の話し言葉で書かれたと仮説をたてていたが、断定する根拠はなく、仮説は否定された。コーパスの話し言葉は、概ね旧ブルゴーニュ州の範囲内にあるが、行政区分だけで説明はできず、距離、地形、交通網、個人的な社会活動などが重層的に影響する。

本研究の方法論の意義は、音声の地理言語学的分析と語彙・形態の量的分析を統合することによって、方言テキストの話し言葉の地理的出自を精度高く推定する方法論的枠組みを提案した点である。綴り字に基づき音価推定を行うという非音声資料を用いた代替的アプローチにより、歴史的・文献的資料を言語地図と接続可能にした。本研究は地理言語学・方言学・歴史言語学の交差点に貢献するものである。

今後の課題として、①音声的に重み付けすることで、39 ストーリーをより詳細にクラスター分析すること、②動詞の形態を法や時制でグループ分けすること、③コーパスにおける音韻の体系化を試みること、④音韻対立の有無によって方言同定を図ること、⑤実際の音声データによる補完を模索する必要性があること、を挙げた。また今後の展望として、Morvan の他の地域およびフランスの他の地方で書かれた資料に対する同じ分析枠組みの応用や、GIS 機能やウェブ地図との連携による研究結果の視覚的共有と普及が考えられる。